

令和7年度 第3回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日時：令和8年1月13日（火）18：00～19：30

場所：川崎市役所南庁舎5階 教育委員会室

出席者：卯月委員、岡田委員、高橋委員、中谷委員、米林委員、浦山委員、宮越委員、百瀬委員、稲葉委員、石村委員

（事務局）落合教育長、田中教育次長、佐藤総務部長、岩上教育政策室長、北川学校教育部長、大野総合教育センター所長、堅月教育政策室担当課長、小竹健康教育課長、鶴木カリキュラムセンター室長 他

欠席者：倉持委員、渡辺委員、五十嵐委員

傍聴者：なし

進行：岩上教育政策室長

司会：堅月教育政策室担当課長

〔配布資料〕

資料1 川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2 川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3 第3次川崎市教育振興基本計画 かわさき教育プラン第1期実施計画（素案）

【概要版】・【本編】

資料4 “学力向上”・“体力向上”に向けた取組について

参考資料 座席表

（18時00分 開会）

議題1 第3次川崎市教育振興基本計画 かわさき教育プラン第1期実施計画（素案）について

宮越委員：2点ほど、私のほうで教育プランの中で特に意識してほしい点があります。

一つ目は、「遊びの中にある学びの視点」というものを、どこかで文章化できないか、ということです。

今、私は富士見公園の一角で行われている「冒険士の広場」を運営しています。ここは、「自分の責任で遊ぶ」「やりたいことを自分で見つけて遊ぶ」を基本にしています。いろいろと手作りの遊具も配置しているのですが、何ととっても人気は穴掘りと工作コーナーです。

とりわけ穴掘りコーナーは大人気で、夢中になって穴を掘り、遠くから水を運んで、川や池に見立てたものを泥だらけになって作ったり、時間を忘れて遊ぶ子はたくさんいます。

「今日はこれでおしまいだよ」と言うと、必ずといっていいほど「まだやりたい」と泣く子がいます。幼児だけでなく、高学年の子や中学生もです。彼らにとっては、小さい頃にやれなかった、やり残した体験をしているように見えます。中にはお父さん、お母さんも参戦します。

ここで私は、「探究的学び」というのはこういうことなのではないかと、改めて実感しています。遊びの中に内在する学びの要素に、私たちはもっと目を向けていくべきではないかと思っています。

二つ目は、Key Projectの4に関わることです。先ほど説明の中にもありました。

この「学びの場」は、いつでも、どこでも、さまざまな学びに触れられるということですね。そこで、「市内のいたるところで生涯学習における機会があふれ」という説明があります。これは非常に良い視点だと思うのですが、私は欲張りです。

市内に限定しないで、学びのフィールドと時間軸の長さが、幼児から高齢者まで入っています。同じように、時間軸を広げてほしいと感じています。

川崎市は幾つか姉妹都市を持っています。北海道、東北、九州にあります。今、廃止が検討されている八ヶ岳少年自然の家がある長野県富士見町とも友好都市です。

少年自然の家については、ぜひ残してほしいと私はパブリックコメントでも提出していますので、ここでは繰り返しません。そこが探究的な学び、アクティブラーニングの最適環境だと思っています。

そのほかにも、以前中学生を連れて宮城県の被災地ボランティアを8年続けたこともあります。また、JICAのプロジェクトでアフリカに赴任した小学校の先生を通して、モザンビークの子たちと交流したこともあります。これは私どもと向こうとの笑顔の交流で、非常に感慨深いものでした。

探究的に学ぶ場、そのチャンスは川崎のまちだけでなく、広い世界の中にあります。この文面では「市内のいたるところ」と書いてありますが、ここは一つ、「市内」ではなく「市内外のいたるところで」という表現に書き換え、場所軸の広さを表現するのがいいのではないかと思います。

以上、2点です。

議題2 “学力向上”・“体力向上”に向けた取組について

【Aグループ “学力向上 “について】

高橋委員：僕が本当にしゃべり過ぎてしまったのですが、まず最初に、これはしょうもない話かもしれませんが、体力と学力、「知・徳・体」という中で、徳がないなというのが全体の枠として感じたことです。

体力のほうは数値データで表される取組が多く、それに対応して学力について考えていくと、どうしても答えがはっきりした数値を追うことにもなってきます。一方で、スポーツのように、生涯にわたって体を動かして体力を維持し、豊かな生活を送っていくという観点からすると、学力についても同じように考えていかなければいけないよね、という話をしました。

学力は個人差が大きく、体力も差があります。だからこそ個別に対応していく方向と、今、最も目標となっている高い学力をどうつけるか。その両方が必要になると思います。これは次期指導要領でも「深い学び」と「個別最適」の二つの実現が掲げられていますので、その区分と同じことになるのかなと思います。

個別への対応として、私が行っている生成AIの活用が大きな役割を果たしています。特に、勉強から離れていた子どもたちが、生成AIを上手に使うことで学びに入ってくる、ということが実際に起こっています。

一つだけ例を挙げると、私が「知・徳・体」を意識したのは、説明資料のスライドをAIに読み込ませると、学力向上と体力向上という二つの柱だけがきれいに抽出され、「徳」が出てこないことが分かりやすく見えたからです。

私はこういう仕事をしていても、文章を最初から読むのが得意ではなく、いつも苦労して時間

がかかります。そこで最近、まずAIに読ませて図にして、その図を見てから文章を読むようにしています。また、AIでフラッシュカードが作れるので、キーワードが並んだカードを使って、意味を確認しながら文章を理解するようにしています。そうすると「自分はこの単語が理解できないから、この文章が読めなかったのか」ということが分かり、読める量が非常に増えました。外国語の論文も、この方法で読めるようになっていきます。

自分なりの勉強スタイルをAIと組み合わせて早く見つけると、さきほどのビデオにあった学校のように、いろいろと面白いことが起こってきます。そういうやり方もあるのではないかと思います、少し紹介しました。

【Bグループ “体力“について】

稲葉委員：では、Bグループのほうですが、話が非常に活発で、いろんな視点がたくさん出ていて、僕もうまくまとめきれないところがあるんですけども、まず、皆さんに共通してあったのは、学力向上の話も体力向上の話も、考えていく視点は同じなのではないか、というお話が出ていました。

その中で、文科省とか、今の神奈川県の中でのデータの比較というのはあるけれども、もう少し広い意味で、国際的な視点や数値、例えばOECDが出しているものなども含めて考えていくことがあっていいのではないかと、というお話がありました。また、諸外国では「体力」という言葉よりも「健康」という言葉の中で、こうした物事を表現しているところもある、という指摘もありました。

「データ」ということが出てきていましたが、データの分析や利活用をどうしていくかという話もありました。企業の中でも、まだそういう人材が十分ではないという話もいただいた中で、どうしてもデータというと横並びの比較になり、「こっちがいい」「あっちが悪い」というイメージにつながる。そうではなく、むしろ個別に、一人一人が“伸びた”とか、“ここをもっと頑張ったらい”とか、動機づけになるようなデータの利活用が、より深まっていくといいのではないかと、というお話がありました。

また、寺子屋の話も出て、昔、私たちの世代が遊びの中や子ども時代の経験の中で自然に育んだものや、そこで身についた体力といった視点も、今後伸ばしていく必要があるのではないかと、というお話もいただいたところです。

以上でございます。

岡田委員：座ったままで失礼いたします。こちらでも、本当に体力向上に関しては活発な意見と、「あ、それもあるな」といういろいろな視点を教えていただいて、とても勉強になりました。先ほどありましたように、体力向上も学力向上も一つなんじゃないか、同じ視点があるんじゃないかというところで、国際バカロレア（IB）の考え方とPISA、OECDの考え方なんかも踏まえたほうがいいんじゃないか、という話がありました。

それはどういう意味かというと、15年先の日本の状況を今想像しても、多分ほとんど読めない。つまり予測が難しい状況になっているので、そういった中で、今の小学校6年生が27歳ぐらい、中学校3年生が30歳ぐらいになったときに、川崎の教育を受けて自分の人生の主人公になっていくことを考えたとき、どうかなと私が考えたときに、文科省もバカロレアもPISAも共通して言っているのは、「学力であるならば知識の量ではなく、知識をどう使うか」なんだという

ことです。私はそこなんじゃないかなと思っています。

そういった視点に立ったときに、例えば教育プランはすごくいいプランです。今までにないと言えば失礼ですが、今まで以上にすばらしいプランになっていると思います。その中で私が一つ挙げたいのはデータマイニングです。データをどう生かして現場に役立つようにしていくかということで、BPSモデル（バイオ・サイコ・ソーシャルモデル）というのがある、そこをうまく使いながら一人一人の特性とか能力を生かすようなデータマイニングで、より充実したものにしていくのがいいのではないかと思います。

そのためには、そのデータをどう教育委員会が集積して、それを現場に戻していくかという仕組みを構築していかななくてはいけないだろうと考えました。

それからもう一つ、大前提として、今までの日本の教育は「子どもたちに失敗させない教育」だったんじゃないかと私は思っています。今は逆で、「いかに早く失敗してもらって一失敗から学べるように」変えていかなくてはならない。いわゆる“F a i l F i r s t”で、最初の失敗から何を学ぶかということが、多分学力向上につながるんだろうと思います。

また、グループで共通して出ていたのが、「共に学んで、一緒に遊ぶ」という言葉でした。共に学ぶということを考えたとき、私は心理学なのですが、日本女子大の名誉教授の宮本美沙子先生が「達成動機と親和動機」の研究をされていて、日本では物事を達成する動機が高まって達成がうまくいくのは、その人が所属する集団の親和性が高いほうがいい、という結果があります。欧米は逆に個人の力量ですが、日本では集団の親和性が高いほど達成動機も高い。宮本美沙子先生です。調べていただければすぐ出てきます。

そういう視点を生かすとなると、川崎でやっている「共生＊共育プログラム」や「キャリア・在り方・生き方教育」なんかをもっと進めていくといいのではないかと思います。

最後に、先ほどの話のとおり、27歳や30歳になる小学校6年生や中学生がどうなっているか読めない中で教育をしていかなければなりません。こちらでも話しましたが、医療では分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬が出てきて、個々に合わせた医療で標準治療が変わらざるを得なくなっている。つまり、そういう状況の中で、私たちが習ってきた言葉でいう「不易流行」の“不易”の部分はいかに徹底していくかが今最も大事だと思います。

そういった意味では、面白くて楽しくてためになる授業を毎時間、毎日、小中高校の中で子どもたちが体験し、学ぶことの楽しさを身につけていくことが強さにつながると思います。これは教育プランには出てきませんが、今お話ししたようなことを、どこかで教職員や川崎の教育関係者が共通理解として持ちながら底上げしていく。そのために教員採用をどうするのか、教育研修をどうするのか、といった工夫が必要だと感じます。

今こちらに企業から来てくださっている委員の方のお話では、現場ではジョブ型雇用のほうに移行していて揺り戻しがあったりするという話も伺いました。ただ、今の子どもたちは、ほぼジョブ型雇用の中で働いていくんだろうということは分かっています。そのときに、どんな力をつければいいのかということにもつながるのではないかと思います。今申し上げたような点は表面には出てこないのですが、何か共通理解を持ってできたらいいなと思いました。

また、もう一つぜひお願いしたいのが、学校給食なんです。学校給食でバックアップしてもらって、体力を上げるためにどうするか。例えば脳の疲労回復のためにどうするかということです。実は、ほかの都道府県でも既にやっているんですけども、中学校でスポーツ大会の前の月ぐらいから筋力をつけるとか、筋力の疲労を回復する給食とか。私立の中学校受験のときには、その

前から脳の回復とか精神的な疲れを癒す給食を出しているところがあるんですよ。

これは、管理栄養士という国家資格と、栄養教諭という国家資格のダブルサーティファイドというか、両方を持っている栄養教諭が考えているらしいんですね。

なので、ぜひ川崎でも、こういう栄養教諭、両方の国家資格を持っている人を学校に一人ぐらい配置して、御家庭に向けて「こういう給食で考えたものはレシピとして御家庭でも使えますよ」とか、「こういうお食事を1か月前からいかがでしょうか」といった提案ができれば面白くありませんか。

多分、どこの教育委員会もやっていないと思うので、先んじて、学校給食で学力を上げる、学校給食で体力を上げていく、というのは発想としてありなんじゃないかなと思うんですけども、いかがでしょうか。

すみません。ありがとうございました。

(19時 30分 閉会)